

オスゾウ 【Elephant bulls】

http://www.upali.ch/bulls_en.html

オスゾウの飼育管理は、大きな問題（難問）であるか？

オスゾウは、ゾウたちの飼育の中で、特別な難問の代表格である。ほとんどの哺乳類のオスたちは、メスたちよりもより力強く、大きくて重い、ゾウの場合もまた同様である。馬の所有者（馬主）たちですらも、種馬に手を焼いているが、自分の種馬を持っている農夫だけは例外である（農家で種馬を飼育している農夫は、例外的にうまく飼育している）。



↑ Maxie

オスゾウは、メスゾウと何が違うか？

オスゾウの場合には、その大きさと強さに加えて、マスト（直訳では発情期だが、そうではない・Musth の章を参照）と呼ばれる特別の現象がある。

マストは、オスゾウをメスゾウのように（直接）飼育することができない影響（結果）を呈する。オスゾウの予防衛生（足の洗浄やケア、体の洗浄など）のために、ゾウ舎内でオスゾウをチェーン繫留することは、過去のものである。オスゾウを依然としてチェーン繫留している施設では、いずれ、ひどい人身事故が発生するだろう（深刻な人身事故の発生が、あらかじめプログラムされているようなものである）。

オスゾウを飼育するためには、相当な努力（苦労）が必要か？

オスゾウを飼育するためには、動物園は膨大な努力をしなければならない。メスゾウとは別のゾウ舎と放飼場の他に、さらに、最高に有能な（キャリアのある・有資格の）オスゾウの飼育係たちが必要である。

オスゾウ用の寝室（獣舎）は、どのように建設されるべきか？

オスゾウの寝室は、オスゾウを入れ替えできるように、もう一つの寝室（交替用寝室）を備え、防護下接触（完全間接飼育）の基本理念に基づいて建設されなければならない。これは、オスゾウ用の寝室が（遠隔操作で）スライドする扉によって、半分に分離できるようにすることを意味する。扉が閉まっている時は、片方の寝室は清掃され、飼料を準備できるだろう。そして、もう一方の寝室では、オスゾウがエサを食べたり待ったりしている。この飼育方法の基本理念では、ゾウの飼育係とオスゾウは直接的に接触しないので、オスゾウによる人身事故は、おおむね避けることができる。



どのようにして、オスゾウを治療するか？

オスゾウの予防衛生（健康管理）を確実にするために、寝室（獣舎）の柵は、強固な（中身が詰まった）鉄の棒で作らなければならない。そして、その棒の間は、オスゾウを洗浄するために充分大きな空間が必要であるが、ゾウの鼻が飼育係に届くほど大きな空間であってはならない（オスゾウの鼻が出ないくらいの狭い鉄格子が必要である）。

どうして、オスゾウを飼育する動物園が非常に少ないか？

上記で述べた構造上の費用のために、オスゾウを飼育している動物園は、非常にまれである。しかしながら、このことは、近い将来、変わらなければならない。統計学的に、生まれてくる子ゾウの半分はオスであるから、繁殖させたいのであれば、オスゾウの飼育ができなければならない。これら総てのオスの子ゾウたちは、新しい申し分のない場所（父親ゾウとは異なる新天地）が必要である。若齢のオスゾウは、4～5歳で早くも飼育係に対して危険になりえるので、約4～5歳という早い時期に、異なる獣舎において飼育すべきである。残念なことに、現在、2頭あるいは数頭のオスゾウを十分に飼育できる動物園は、ほとんどない。

スイスにおけるオスゾウの寝室（獣舎）は、どのような状態か？

残念ながら、スイスのいずれの動物園においても、オスゾウの現在の飼育状況は満足ではない。

チューリッヒ動物園のたった1頭のオスゾウである Maxie は、非常に小さくて窮屈な交替用の寝室（分割可能な二つの寝室のもう一つの寝室）で暮らしている。この交替用の寝室の長さは、Maxie の体長の2倍をわずかに越える程度である。Maxie が自分の向きを変える時には、美しく長い牙を壁や柵にぶつけないように牙を上下させなければならない。これらの窮屈な状態は、主にマスト期の間において大きな問題となる（Maxie のマストは、たいてい冬期に起こるので）。

冬期間は、気象的な理由のために、ゾウたちは、放飼場に短時間だけ放飼される場合がある。（雪が積もった）冬期の放飼場において、ゾウたちは、常同行動をしたり、エサを求めたりすること以外には、そこには、ゾウたちがやりたいことが何もない（雪と寒さで、それどころではない）。

ゾウの常同行動（Stereotypic behaviour の章を参照）は、長時間、ゾウが頭や体を前後に揺らし続けることが典型的であり、そのゾウが、ずっと立っていた地面に、非常に強烈な深い足型を刻み込むほどである。

2005年に、Farha（メスゾウ）が生まれた後、メスゾウたちの寝室のスペースを増やすために、ゾウ舎を、若干、拡張工事した。さらに、現在のオスゾウの窮屈な寝室状況を、ときおり改善できるようにするために、メスゾウたちの寝室拡張工事は、オスゾウの Maxie が時々、この広くなった寝室を使えるように計画された（右写真）。



（メスゾウたちの寝室を使う Maxie）

サーカスのオスゾウは？

現在では、少なくとも、ゾウにとって適した環境であるかどうかという点で、サーカスでは、オスゾウの飼育は不可能である。数年前までは、サーカスの職員だけではなく観客からも異なる意見があった。

実際のところは（前述したように、サーカスでオスゾウを飼育することはできないけれ

ども)、今でも、オスゾウは、いくつかのサーカスで飼育され、また、小さなサーカスですらオスゾウを飼育している。アルベルティサーカス (Circus Alberti) のステファン・フランク (Stefan Frank) と一緒に写真に写っているオスのアジアゾウ (Shenka) は有名である。しかし、これは、サーカスでオスゾウを飼育できないという法則の全くの例外である。40 歳以上の Shenka は、サーカスでの一人ぼっちの生活に完全に適応したように思われる。



↑ Shenka

昔、オスゾウはどうだったか？

昔、サーカスでは、オスゾウを自慢したいために、少なくとも 1 頭のオスゾウを自分の獣舎に所有していた。それは (サーカスでオスゾウを飼育し公演させることは)、調教師とオスゾウの双方の生命を奪うひどい事故を何度も何度も引き起こした (多くの調教師が、オスゾウに殺され、攻撃したオスゾウは現場で警官に射殺されたり、懲罰のために安楽死されたりしてきたことを指している)。

オスゾウがマスト期になった時は、もはやオスゾウはサーカスの舞台上で演技することはできず、サーカス公演のグレード (格) は落ちてしまった。オスゾウの悲しい例は、1930 年代にアメリカで暮らしていた Tusko である。Tusko は、「殺人鬼」として恐れられていたので、けだものとして観客に見せるために、鎖で縛られてぐるぐる巻きにされていた。



↑ Tusko